

シリーズ ■ 中学校武道

授業の充実に向けて

112

つまづきをどう克服したか⑤ (教員のみによる初めての相撲授業)

広島市立観音中学校

広島市立観音中学校は、広島市街地から南西に車で20分の場所に位置する。昭和20年8月6日、広島市第二高等小学校（観音中学校の前身）も原爆の大きな惨禍に見舞われた。毎年、広島平和記念日の前日である8月5日に第二高等小学校慰霊祭を行っている。

現在、観音中学校では、「生きる力を育てる教育の創造」を学校教育目標とし、各学年5〜6クラス、およそ600名の生徒が元気に学校生活を営んでいる。

その観音中学校では、女子生徒は平成25年度より、男子生徒は平成26年度より、相撲を専門としない保健体育科教員のみで相撲授業が開始された。昨年10月31日の取材をもとに、広島市立観音中学校での相撲授業の実践を紹介したい。

1 相撲授業をやってみないか

中学校武道必修化の始まる前年度の平成23年5月、広島市教育委員会では市内における武道授業実施状況の調査を行った。それによると柔道のみを実施する学校が31校、剣道のみが28校、柔道と剣道を実施する学校が5校となっており、相撲を実施する学校はなかった。学習指導要領では「武道の運動種目は、柔道、剣道又は相撲の

うちから1種目を選択して履修できるようにする」とあり、武道授業の更なる充実をはかる観点から、各学校が相撲を含めた3種目の環境を整備することが課題となっていた。

そんな折の平成24年度、中山昭彦観音中学校校長（当時）のもとに広島市教育委員会指導主事から、観音中学校において相撲授業をやってみないかとの打診があった。当時、観音中学校では武道授業は男女とも柔道を実施しており、相撲を専門とする教員も見当たらなかった。しかし、中山校長

自身は相撲授業の指導経験があることから、この打診を受諾したのである。校長室に教頭、そして保健体育科教員の全員が招集され、中山校長は口を開いた。「色々と用具や土俵などを準備しなければいけないが、市内の古田中学校の女子において実践例はある。…この観音中学校でも相撲授業をやってみないか」。当時の状況を森光千佳保健体育科教諭は「あれは相談というより、指示に近かったです」と振り返る。

2 指導法を学習する

森光教諭はバレーボールが専門であり、保健体育科教員としても十数年のベテランである。しかし、武道授業の指導経験は柔道と剣道はあるが、相撲は全くなかった。「相撲なんて出来るわけがない」。そうは言ったものの、指示に近い相談を受けている。森光教諭は相撲授業の指導法を探り始めた。はじめに平成25年度に広島市

教育委員会の実技研修会に参加する。研修会は1日のみであったが、古田中学校で相撲授業を行っている担当教諭が中心となり、保健体育科教諭を対象にして相撲授業における指導法や事故防止を徹底するための方法が提示され、森光教諭にとって研修会は有意義なものとなった。

3 初めての相撲実践

そして、平成25年度に観音中学校で初めての相撲授業が中学2年女子において行われた。全12時間の授業では基本となる技を中心に指導し、最後には試合を行った。現在の1年生が学習する程度の授業だったという。「生徒は想像以上に、授業についてきてくれました。そして楽しんでくれました

4 さらに研修とある出会い

そこで、森光教諭は塵浄水ちりじょうずなどの所作の意味、他県での実践例を含めた授業のための実技指導法（準備運動、ウォーミングアップの行い方、試合の進め方）の理解を深めた。また、この講習会で初めて相撲マットを目にした。実技講習会の会議室で広げられるその

手軽さに感動。また、まわしを着けた状態と同様に相撲の攻防が展開できる相撲パンツも初めて着装した。その着装の容易さ、身に着けた前と後での技の繰り出しやすさの違いに驚き、相撲パンツの購入を決めた。

この後、森光教諭は研修会で学んだ指導法をもとに、さらなる教材研究を進めて、観音中学校での指導法を確立していった。「保健体育科教員として十数年が過ぎて、授業で行う種目はほぼ指導できるようになっていました。その時、相撲という新たな種目に出会いました。教材研究も新鮮で楽しかったです」。森光教諭はこの時の心境をこう語った。当初は、相撲授業に否定的であった森光教諭も生徒と同様にその魅力にひかれていったのである。

そしてこの講習会ではもう一つ大きな出会いがあった。アマチュア女子相撲（50kg未満）の世界チャンピオンで静岡県焼津市立大井川中学校教諭の松浦みな美氏との出会いである。世界チャンピオンといえども同じ教員である。授業

での苦勞を理解してもらい、より質の高い授業のための研鑽に共感をもってくれた。すぐに互いに打ち解けて「ゲストティーチャーとして観音中学校に来てほしい」と森光教諭は松浦氏に依頼した。これは平成26年度に男子の授業において実現することになった。

5 世界チャンピオンによる相撲授業

平成26年度、観音中学校は広島市の体力向上推進事業の中で相撲授業のモデル校となった。市教委



松浦氏による実技指導

が男子の激しい攻防でも十分な広さをとれる相撲マットと相撲パンツを購入。こうして観音中学校では広島市立中学校男子生徒による初めての相撲授業が行われることとなった。

授業者はサッカーが専門の西正利教諭があたり、授業では正式にゲストティーチャーとして松浦みな美氏に來校してもらった。実技指導では「寄り」と「押し」のcott、「上手投げ」「下手投げ」を生徒に指導した。男子は女子よりも投げ技に興味を示しているため大いに盛り上がったという。

授業の最後に松浦氏と西教諭に



松浦氏と生徒による取組

よる取組が行われた。生徒たちが固唾を飲んで見守る中、体格で勝る西教諭を小柄な松浦氏があつという間に投げ飛ばした。生徒たちが驚いている中、松浦氏は「相撲は力がある人が勝つ競技ではありませんが、いかにして相手のバランスを崩すかが大切なのです」と説明した。

これに生徒たちは感動し、男子だけでなく女子も相撲の攻防の魅力にのめり込んでいったという。

6 大相撲広島場所と広島市少年相撲教室

授業終了後には「せっかく体力向上推進事業の指定を受けているのだから」と、市教委の働きかけにより大相撲広島場所も見学。間近で見る力士たちの技に、生徒たちは「あれは何の技じゃろ」「あれはうちにもできとるね」などと、自身が体験した相撲授業と比較しながら大相撲を見学していたという。

平成28年度には、第1学年を対



広島市少年相撲教室の様子

象に「広島市少年相撲教室」を開設した。この相撲教室では、友綱親方(元関脇・旭天鵬)をはじめ、現役力士の春日嶺関、濱春日関を中心に6時間にわたって相撲の指導を行った。

NHKをはじめとするTV4社、新聞数社も取材に駆けつけた。そのなかにはNHKで相撲の実況中継を行っている有名アナウンサーもいたという。午前はDVDの視聴から始まり、相撲体操、男子にはまわしの付け方を指導。午後は相撲大会となった。生徒たちは5人がかりで力士に挑み、大変な盛り上がりを見せた。

その盛り上がりを受けて、TV取材終了後にもかかわらず、アナウンサーは生徒たちの試合を実況したという。友綱親方は教室の最初と最後に「相撲は好きですか?」との質問を生徒に投げかけた。最初の質問時には手が挙がらなかったが、最後には多数の手が挙がったとのことである。

7 授業の実践

では、観音中学校の相撲授業を見ていきたい。

授業は2クラス合同で男女別習により、武道場がないため体育館で実施した。平成29年度は男子は引き続き西正利教諭が、女子は森光教諭に代わって渡部夏海教諭が1・2年生の相撲授業を受け持っている。

取材では1年生の男女の相撲授業を見学した。はじめに女子が体育館に入り、更衣を行う。女子の更衣後に教室で体育着に着替え済みの男子が入場した。

この日、女子は3回目の授業を実施。1・2回目では、DVDの視聴と基本となる動作が指導された。はじめに6つの相撲部屋にわかれて、親方(リーダー)を中心に授業が展開されていく。部屋ごとに小さいサイズの相撲マットを敷いて、前述の相撲パンツを着装する。相撲パンツは100枚ほど学校が準備しているという。

準備運動の後は、相撲の基本的な動作が2回目に続いて指導された。渡部教諭の説明のもと、生徒たちは中腰の構えをとり、両手で内側から足首をとる。そして左右



相撲パンツは体育着の上から容易に装着できる

に20回身体を動かしていく。この動作はバスケットボールの動きを参考にした「スパイダーストレッチ」。股関節を柔らかくする効果があるとのことだ。次は、柔道の受け身の指導を参考にした「受け身ダルマ」の実践。これは首を鍛えることができ、投げ技でのケガを防止する効果がある。これらの動作は、渡部教諭と森光教諭たちが教諭陣で独自に開発した教材であるとのことだ。

その後は、段階的な受身の練習となる「そんきょ受け身」と「中腰受け身(引き合い)」が指導さ



スパイダーストレッチ

れた。これらは研修会での指導法を参考に取り入れている。「中腰受け身」では、各部屋の力士(生徒)が親方の前に列になる。親方が力士の交差する手を取って、力士は転がりながら受け身をとる。渡部教諭からは「低いところから受け身を取るように」と注意点が挙げられた。渡部教諭は、生徒たちを集めて「どうすれば上手く受け身を取れるのか」と生徒たちに投げかける。生徒たちからは「あごをひく」「つま先と膝を開いて、腰を下げる」などの声が挙がった。「それらを意識してもう一度



そんきょ受け身

教育のプロが選ぶ
信頼の紙面

山積する教育課題の解決のヒントに
日本教育新聞社

教育が大きく
転換しています

活字離れの時代
俯瞰で見られる教育情報

本紙独自の全国調査を中心に
教育界の羅針盤

お申込・お問い合わせ
0120-43-3746

— 形態 —
B3 (プランケット)判(12頁)
— 発行 —
毎週月曜日(月4回・第5週休刊)
— 購読料 —
月額 2,700 円
(本体価格 2,500 円+消費税 200 円)
年額 32,400 円
(本体価格 30,000 円+消費税 2,400 円)
— お支払方法 —
銀行引落からコンビニ支払、
カード決済まで、ライフスタイルに
あわせてお支払方法がございます。

8
まとめ

教諭陣によると、相撲授業の魅力は、生徒たちの興味が高く、女子でも攻防が楽しめることだ。課題としては、地域で相撲授業のための研修会が少ないため、教員が取り扱える技が少ないことと礼の指導が挙げられた。

教育委員会や多くの関係者に支えられて、保健体育科教諭たちの尽力により、手探りでやってきた観音中学校の相撲授業。研修会で

の指導法をそっくり授業で活用するのではなく、学校現場での状況に応じて、研修会での教材を下地にして教員自らの経験値を活かした指導法も授業で展開する。この件においても、生徒の意欲に 대응しようとする教諭陣の熱意がうかがえる。必修化となつて6年目を迎えて、各武道団体から提示された指導法以外にも学校現場では素晴らしい実践法が生まれてきている。今回の取材ではそのようなことを実感した。

最後に森光教諭に相撲授業の感想を伺った。今後とも観音中学校での相撲授業発展を期待したい。



◎観音中学校森光千佳教諭

「相撲授業はとにかく場の設定が大変で、用具を揃えるのに苦労しました。しかしやってみてよかつたと思っています。」

『とにかくやってみよう』を信念にして保健体育科をあげて皆で取り組みました。指導法がわからなかったので次はこの人に聞いてみよう、と、色々な人から助言をいただき

ながら、教材研究を重ねて授業を行っていくうちに授業が楽しいなと感じました。これも生徒たちが興味を示してくれたおかげだと思います。

相撲は相手と直接触れる武道だからこそ、礼にはすべて意味があり、相手を最後まで大切にすることなど実感しました。地域においてもっと相撲授業を勉強する指導者研修会などの場があったらと思います。今後も安全に相撲授業を行いながら、柔道など他武道の授業でも相撲の良さを活かしていきたいと思つています」

(文)長澤克成 写真)横内裕史



中腰受け身



いもむしどすこい



タブレットを使ったグループ学習



男子の授業では、激しい試合が展開された

行いましょう」と渡部教諭。生徒の気づきを意識した授業が展開されている。

続いては、すり足の練習となる「いもむしどすこい」。こちらも研修会での指導法からの動作であるが、名称は生徒が親しみやすいように変更されている。力士たちは列になつて前方の力士のまわしを取つて中腰の姿勢のまま、すり足を行った。「この『いもむしどすこい』は運動量も確保でき、生徒たちがくつついているのでコミュニケーションもはかられる有効な動作です」と森光教諭から説明が

あった。

女子の授業の最後は「四股」。四股ではICT(タブレット)を活用して、生徒が自分自身の動きを研究する。タブレットは指定校となつたことにより学校が購入。「今の生徒は、身体を動かす時、自分の身体の中の部分が動いているのかわかりません。ですので、タブレットを使って自分の動きを確認するのは非常に有効です」と森光教諭。相撲の他にマット運動などでもタブレットを活用しているとのことだ。四股の指導では、部屋ごとに円くなつて、タブレッ

トで動画を視聴。より良い「四股」を目指して、さまざまな意見が挙げられた。観音中ではグループ学習を重視している。タブレットでの動画視聴は、複数によりその画面を視聴すれば意見交換の機会を増やすことができる。タブレットでの相撲授業は、学校が重視するグループ学習という点でも有効であるのだ。

授業後、四股などの動作で恥ずかしさは感じないのかと生徒に質問してみたところ、「最初は恥ずかしかつたけれど、授業ではみんなやっているから恥ずかしさは

なくなつた」との返答があつた。一方、男子は5回目の授業を行った。女子とは異なり、公式な試合が展開された。黙想後に「そんきよ受け身」「中腰での受け身」などの準備運動の後、この日は、頭をくつつけた状態からはじめる試合を行った。審判は行司を真似て、軍配をもつて試合を判定する。「男子は激しい試合となるので、安全を第一として万全を期します」と語る西教諭。授業では土俵際で逆転するなど粘り強い試合が展開されていた。